

高齢者A氏B氏の余暇活動について

—高齢者における余暇活動の類型化と高齢者に対する
レクリエーション介入方法に向けての事例研究(1)—

○山崎 律子、上野 幸、高橋 和敏(余暇問題研究所)

キーワード： 高齢者、余暇活動、レクリエーション、レクリエーション介入方法

問題の所在

近年、高齢者問題が社会問題のひとつとして、ますますクローズアップされてきた。とくに介護保険導入は、新たな問題提起の契機となった。

いっぽうレクリエーション関係分野では、介護福祉士資格取得の場合と同様、ホームヘルパー資格(1～3級)取得の場合にはカリキュラムの中にレクリエーション指導法を必須科目として受講しなければならなくなった。この事実は、レクリエーションが福祉関係分野において必要不可欠のものと認識されるようになったものとして評価できよう。

しかしながら、1994年6月に厚生省老人保健福祉局長の私的懇談会としての介護計画検討委員会が、介護計画中間報告として「高齢者ケアプラン策定指針」(通称高齢者ケアガイドライン)を発表した。その中の第3章問題領域別検討指針で「領域10アクティビティ(日常生活の活性化)の必要性」と題して述べているが、その定義づけにおいて、レクリエーションの概念規定もなされないままにレクリエーションに対する誤解を助長するような、レクリエーションをある特定活動種目を想定した使われ方をしている。(レクリエーションを古典的活動概念の延長線上でとらえているものと考えられる)

また、アクティビティは英語のactivityを意味する言葉と推測されるが、英語のactivityをことさらに意義づけしようとしたきらいがみられる。したがって高齢者介護の現場では、アクティビティとレクリエーションの対比が行われ、その意義を巡っての混乱を来し、レクリエーション不要論まで出るところも散見できる。

いっぽう、高齢者へのレクリエーション介入の必要性が強調されてくるにしたがい、高齢者というひとつの枠内に入れ、その画一化の懸念が多くなった。一般に高齢者といえ、日本においては、60歳以上の定年退職者を指す場合が多い。これは従来からの産業社会に当てはめた行政的な規定である。しかしながら、高齢者といっても年齢に大きな幅もあり、身体的・精神的・社会的にも個人差が著しい。福祉の現場では、個人差を十分認識し、効果的に対応していかなければならない。そのためには、きめ細かい個人へのアセスメントを実施可能にさせる方策の確立が期待される。

使用用語の概念

本研究に使用された主な用語の概念規定は、次の通りである。

- *レクリエーション・・・「個人的であれ集団的であれ、達成感や満足感があり、かつ社会的にも承認される経験(主に自由時間で)をうながす働きかけ」を採用。
- *余暇活動・・・・・・・・レジャー活動とほぼ同義に解する。余暇は、個人の経験・時間・活動の織り成す現象であり、結果的に満足感や不満足感も醸し出すもの。
ふつうは、「あそび」と実感する。

作業仮説

川元の検証結果（Visual Analogue Scale of Happiness(VAS-II)により測定した主観的幸福感の関連要因の検討；要因分析結果からみたVAS-IIの尺度特性－高齢者のケアと行動科学1999－）の“経済的余裕・健康状態と主観的幸福感との関連は有意である”から派生して、次の作業仮説を立てた。

現在の余暇活動の形態は、その人の人生経歴によって培われた信条に基づいている。

研究目的

本研究は、以上のような問題意識をもち、当初設定した最終研究目的達成のために、その第一段階としてA氏およびB氏を事例として取り上げ整理するとともに、余暇活動の志向と実践を把握し、作業仮説の検討を行うことである。

研究方法

動植物や人類に関する分野において、克明な観察結果の集積によって成果をあげている事実に着目して、本研究も質的アプローチによる観察と面接を主な研究方法とした。

A・B両氏のデモグラフィック的側面も並行して把握した。

観察期間： 1998年11月10日～1999年8月15日

面接日： A氏・・・7月28日

B氏・・・7月29日

面接者： 山崎律子、上野 幸

結果と考察

A氏の場合

年齢： 71歳 昭和3年1月生れ

性別： 男性

出生地： 北海道

現況：

- ・浦和居住。夫婦2人住まい。子供2人。孫4人。
- ・57歳時会社勤務を定年退職（3年関連会社嘱託）。
- ・現在老人大学同窓会理事（平成7年から）、英語通訳ボランティア、定期的に体操とダンスを行っている。

人生経歴：

- ・昭和3年より北海道札幌市在住、15歳か16歳のとき予科連練に入隊。予科練のとき第二次大戦敗戦に直面。
- ・現在の三菱マテリアルに入社（札幌）昭和28年（？）に結婚。
- ・昭和39年英語検定2級取得し、自宅近辺のこどもたちに英語を教えた。
- ・昭和48年東京本社人事部に抜擢転勤。
- ・4年後高松の関連会社に出向。腰痛になる。社会保険労務士取得。
- ・定年前に本社に戻り、社史の編集に当たる。その後浦和に住居を構える。
- ・58歳のとき、左手手術。61歳のとき、声帯麻痺で手術。

- 信条：
- ・父を尊敬して、父の言葉を信条にしている。曰く「世の中はうまく渡れない。とにかく働きなさい。稼ぐに追いつく貧乏なし」
 - ・大戦中は「天皇陛下のために」で、会社勤務では「会社のために」
 - ・現在は「自分のために」
 - *「自分のために」ということは、自分勝手にを意味しない。他人に迷惑をかけない気持ちが溢れている。
 - ・小学校6年のとき、北海道で初めてドイツ人を見た。それは印象が深く、その後英語を学びたいという動機となった。
 - ・昭和20年敗戦を迎え、世の中が180度変わった中で、「とにかく生きていかななくてはならない」ということであり、就職してからも、与えられた環境の中で、何事も真面目に全力で取り組みたい。
 - ・定年少し前に、健康をこわしたことが契機となり、健康が何よりも大切であると考えている。

- 考察：
- ・いわゆる戦中派に属している。戦争中は、青春を予科練習生に捧げ、国のために一生懸命に頑張ったが、敗戦を迎えたことにより、正しいと信じていたことが、正反対に悪に変わり、心の空白を克服して、戦後就職して、会社一途に自分を捧げてきたことは、戦後生まれの現在の中堅層以下青少年にはみられない“忍耐強さ”と“真面目さ”をもつ。
 - ・健康状態は良好。
 - ・人生を前向きにとらえている。
 - ・余暇活動に対して積極的である。ただし活動種目にバラエティに富むとはいえない。しかし、関係しているところは、リーダーシップをとる。
 - ・総じて真面目タイプである。

B氏の場合

- 年齢： 72歳 昭和2年3月生れ
- 性別： 女性
- 出生地： 東京
- 現況：
- ・埼玉県居住。 1人住まい。 子供は2人（別居）。
 - ・週2回介護ボランティアに従事。
 - ・月水金は、朝からYWCA-WOWにて水泳。
 - ・火金は、YWCAで食堂ボランティアをしている。
 - ・その他の日は、俳句・墨絵を楽しむ。晴天の日は、近くの山歩きをしている。夏期は、キャンプなどの手伝いをする。浅草が好きで、土曜日は浅草に出かけることが多い。
- 人生経歴：
- ・商業学校卒業後まもなく結婚。
 - ・第二次大戦中、山形蔵王に疎開する。そのとき13人の大世帯を切り盛りする。疎開中3人目の子供を出産。
 - ・戦後、夫の病気などあり、働くことにする。

- ・健康（腰痛）のために、腹筋と背筋を鍛えなさいとアドバイスを受ける。当時30代であったが体重60キログラム（現在は47キログラム）あった。泳げないがYWCAのプールに通いは始める。

- ・働きながら絵も始める。これらは気分転換と健康のため。

- ・その後、夫が死別する。

信条：

- ・「今が青春」と思う。時間を好きなことに使えることが、たいへん楽しい。お金はないけれど、健康がいちばん。

- ・他人に愚痴をいわない。その気持ちを俳句に表した。

 - －踏まれても 土手のタンポポ 光咲く－

- ・ボランティアをしていると、他人に「あなたに会うのが楽しくて」といわれると、自分でもたいへん楽しい。

- ・活動的に行動する。娘や孫からも名前を呼ばれるくらいである（クメちゃん）。

- ・相手のためにと考えると結果的には自分のためになる。

- ・死亡した後は、献体をしたい。

- ・自分から何かをすることより、頼まれることが多い。頼まれると一生懸命になってしまう。しかし、それが楽しい。

- ・YWCAで水泳をしなかったら、今の自分はないと思う。

考察：

- ・戦中派である。

- ・戦争中と戦後にかけて、たいへん苦労した跡が伺える。

- ・明るい性格。積極的に生活行動をしている。

- ・毎日が余暇活動（ボランティアも含む）に忙しい日々を送っているが、真に楽しそうである。

- ・苦労や不満もプラス志向で解消している。

まとめと今後の課題

今回本研究においては、A氏およびB氏を事例として、観察・面接を実施したが、両者に共通することは、①人生経歴の中で、少年期から青年期にかけて、戦争を体験している。②戦後の立て直しのために、苦労して働いた経験の所有者である③生活への前向き姿勢をもつ④長い人生経歴のせいか、生き方への明確な考えをもつ⑤明るい印象があるなど、察し取れた。この両者の余暇活動の形態は、人生経歴において培われた信条に基づくものであると作業仮説を明らかに証明できる結果となった。しかしこれは経験的・直観的のみであるので断定できるものではない。また、高齢者の余暇活動については、両者はモデル的存在であり得るが、余暇を楽しむにも、少しゆとりをもちたい。この年代にみられる特徴は、何ごとにも一生懸命になる気質がある。したがって、余暇活動にしても濃密にしたくなる傾向がみられる。その結果、しなければならぬという義務感にさいなまれることが懸念される。

今回は、たまたま余暇活動に対して積極的かつ協力的な事例であったが、今後の事例では必ずしも協力的ではな方に直面することが予想される。それに対する面接対処法をあらかじめ検討することが望まれる。